

# アジアを 読む

13

## 中国の今を見る教材 - 中国テレビ映画シリーズ

中国のテレビ映画シリーズにはまっ  
てしまった。あるテレビ映画が発端であ  
る。劇場用ではこれまで100本近くの  
中国映画を見てきた。今をときめく張  
芸謀監督の出世作、赤いコウリヤンの  
内容について、香港の新聞記者連中と議  
論したことも良い思い出。大の中国映  
画好きだがまさかテレビ映画にまで  
めり込むとは思ひもしなかった。

きっかけになったのは、走向共和。昨  
年4月から5月にかけて中国で放映さ  
れて波紋を呼んだ。清朝末期の西太后  
時代から日清戦争、清朝の崩壊、皇帝の  
座を狙った袁世凱の生き様などを描い  
た大作(59回)である。帝政から孫文が  
唱えた共和制実現までの苦難の道のり  
をドラマ化した。

西太后、李鴻章、袁世凱ら中国では評  
判の芳しくない人物を新しい角度でと  
らえ、なぜ新興国の日本との戦争に敗  
北したのか、なぜ近代化に乗り遅れたの  
かなどを問い直す歴史映画である。放  
映時にその大胆な歴史・人物解釈など  
が論議を呼び、日本の新聞でも紹介さ  
れたものだった。ただ、中国ではいま  
に再放送されていない。

なぜ、再放送されないのか、その理由  
も考えながらこの長編シリーズを2週  
間ほどで見終えた。その理由は、中国の  
今にあるよつだ。今の中国を考えな  
がら、このテレビ映画をみると示唆して  
いるものは多い。

これに魅了されて、立て続けに多く  
のテレビシリーズを買い込んでしまっ

た。DVD店主に中国で話題をさらった  
ものばかりを選んでもらったがこれが  
また面白い。たまたま、張芸謀監督がカ  
メラマン時代に撮影した「一人と八人」、  
同監督の英雄などに出演した陳道明  
主演の2作品「黒洞」と「冬至」が混  
じっていた。この犯罪映画から見始め  
た。思わずうなづいてしまった。

引きつけられたのはストーリーであ  
る。実際の事件と重なってしまっているので  
ある。たとえば、密輸、汚職、連続殺人事件  
を描いた「黒洞」。市長、市共産党委員  
会副書記、税関幹部、それに新興企業家ら  
がつんざりするほどの悪行を重ねる。

中国沿海部の架空の市を舞台にして  
いるが、市、市党委員会、税関の幹部、企  
業家などがそろうた密輸、汚職といえ  
ば、中国通ならば思い浮かべる有名な事  
件がある。中国建国以来最大規模とい  
われるアモイ巨額密輸事件である。この  
事件は99年に摘発され、300人以上  
が訴追、14人に死刑判決が下った。密輸  
による脱税規模は約4500億円にも  
達した。この事件の摘発当初にたまた  
ま取材でアモイに滞在していた。街中に  
陰鬱な緊張感が漂っていたことを今で  
も覚えている。

アモイの巨額密輸事件を考えなが  
ら、このテレビ映画シリーズをみると  
とても架空のストーリーとは思えない。

続けて見てしまった。「冬至」は、銀行  
幹部らの資金横領事件がテーマ。普通  
の人々が悪に手を染め、悪の連鎖が広  
がっていく。こんな映画である。こ  
の映画も、上海の某国営銀行をはじめ  
とする実際の横領事件を連想させてし  
まう。

DVDショップをのぞくと中国のテレ  
ビ映画シリーズには犯罪、警察ものが  
相当に多い。

先の全国人民代表大会の最高人民法  
院報告などによると、昨年1年間の国  
家公務員の不正事件は2万2986件  
にも達した。また、横領、収賄などで摘  
発された国有企業関係者は約1万50  
00人にも上る。中国テレビ映画の犯罪  
ものの流行は社会の実態や弱者の怒り  
を反映すると同時に、汚職・腐敗に対し  
て警鐘を鳴らす狙いもあるのだろう。

企業犯罪もの映画の隆盛で、企業家  
はすべて悪として見られかねない風潮  
が出てきた」と嘆く中国の経営者も出  
始めている。そういえば中国の長者番付  
に登場する企業家の脱税、不正な資産  
形成事件も後を絶たない。経営者のこっ  
した嘆きを聞くと、犯罪ものテレビ映画  
の流行は犯罪抑止効果もあるよつだ。  
さて、今晚はどんなテレビ映画をみな  
がら、中国の今を思い浮かべよつか。

(日経香港社 奥村幸広)